

一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10-10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42-0211
定価 1部 150円
備 橋本清文堂

新会長に

渋谷亮治氏を迎え 宮会長退任される

一泉同窓会は、このたび新年度をむかえて、役員の変更が行われた。

このため、去る十月十五日に開催された一泉同窓会総会の席上にて、次期会長として渋谷亮治氏が選出され、一泉同窓会は、あらたな第一歩をふみ出すこととなった。

退任された宮前会長は初代会長、英 安吉氏のおとを受け継ぎ、十数年の長きに亘って会長職をつとめられ、今日の一泉同窓会発展に寄与された。

今後、渋谷新会長のもと、次の方々が副会長となり、会長を補佐し、同窓会の運営にあたることとなった。

新副会長

- 藤田 誠一(一中33回卒) 山長 与作(一中44回卒)
- 山本 道生(一中54回卒) 三野 裕(泉4回卒)
- 西尾 稔(泉5回卒) 柴野常太郎(泉6回卒)
- 中谷 道子(泉6回卒) 浅香以都子(泉10回卒)

—以上の八氏—

同窓会長を交替するにさいし これ迄のご協力を感謝します

宮 太 郎

この度、一泉同窓会会長の交替に際し英前会長のおとを受け継いで十六年、その間、役員、各期委員の方々は勿論、会員皆様のご支援をいただき、八十周年、九十周年の各創立記念行事を盛大に挙行させていただき感謝に堪えません。

また、昭和五十六年度から始まった新校舎の全面改築につづき、その落成式等幾多の想い出が残ります。

今後、同窓会の中心も愈々泉丘出身の会員が中心となり新しい息吹きの導入と共に新会長のもと益々親睦を深め、活動されんことを祈念し今後の発展を期待いたします。



ごあいさつ

一泉同窓会会長 渋谷 亮 治

会員の皆様には、益々ご健勝ご隆昌の事とお慶び申し上げます。

はからずも本年度総会におきまして、会長職をお預りする次第に相なり、若輩非才の身で恐縮致しております。

永く深い伝統と広がりを持つ一泉同窓会のこれからも、たゆむことなく前進発展を続ける歴史の一コマを、身を引きしめて担って参りたいと肝に銘じております。

何と云いましても同窓会は、同窓生一人一人の、そして全員の結集体であります。今はやりの経営論というホロンの組織であろうかと思ひます。個と全体の生き生きとした調和の中で、活力ある、また楽しい活動が出来れば幸いと念じております。

諸先輩方、諸役員の方々のご指導ご支援を賜りまして、何とか任を全うさせて頂きたく、ご挨拶を申し上げる次第であります。

「一泉」第十一号によせて

泉丘校蔵書解題目録の

編集を終えて (8)

大野弁吉の稿本

「応象寛曆書」

山 森 青 硯

(一中三十三回卒)

筆者が泉丘校に通い、最も驚いたのは、昭和五十四年五月十六日同校図書館階下室に於て、大野弁吉の稿本「應象寛曆書」を発見したときであつた。

然も雑書と一緒に在つた。特に和漢書の整理済は二階書架、階下は項目不明、として未整理の書冊であつた。(桑山周一氏聞書)

先ず筆者の目をひいたのは、三ヶ所にある「鶴寿軒一東」の墨書捺印であつた。

緋けば緋く程、弁吉独特の墨書写本であつた。

上編四冊、大野弁吉著 著者自筆本 一八・八×一四・五

蔵書印「石川県尋常中学校蔵書之章」 難読印一

昭和五十三年六月一日、於石川県立郷土資料館「銭屋五兵衛展」があつた。その時、泉丘本と同名同題の



以月東西定度之餘弦除之即月天実之半径

の如くである。弁吉確信ある論説場所には必ず「鶴寿軒一東推之圃」の署名捺印がある。例えば前記「上編之二」巻末に、

視寛政曆 鶴寿軒一東推之 圃

天保十三年壬寅年六月十五日壬辰

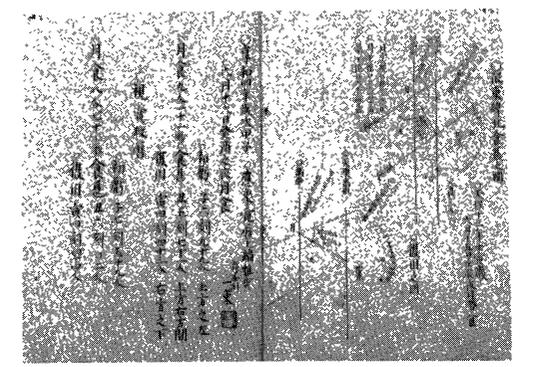
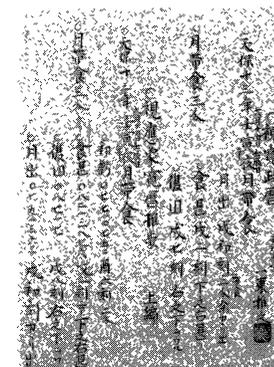
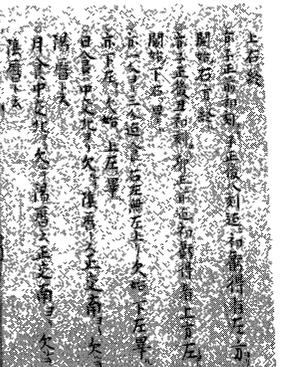
日夜月帶食云々

とある。按うに、同じ本多利明の流れをくむ遠藤數馬が、文政十年(一八二七)能登の宝達山の高さを測り、はては地球の半径を測定したのと其の軌を一にしている様に思えてならぬ。

筆者大野弁吉を語るに、どうしても銭屋五兵衛を語らねばならぬ。弁吉、銭五車の両輪の如く、表裏一体と云えよう。

我が郷土碩学国府種徳氏が省内省に入ったとき、未だ幕臣勝海舟が居た。曰く、加藩は早まったことをした。幕府は銭屋五兵衛の海外貿易の件を既に知り、見て見ぬふりをしていたに、シーボルトの異法海外持出しも既知であつたと云う。我邦前途に深い理想を画しておられたに違いない。弁吉の博学もとより幕府の知る処、海舟つぶさに述べたと云う。

抑々天保十年(一八三九)フランス政府が、公式に写真発明ダゲールを発表した。それから約一年にして



我邦に輸入されたは、寔とに早しと驚異で衆は見た。先師鑄木勢岐氏は弁吉の写真術を調べれば調べる程、不可解の淵に沈むと云われた。(ダゲールより早期となる)

弁吉の写真資料は九州でも大野でもない。駿河の清水であると。此の話は史実を離れて御伽化するので止めたと漏らされた。

筆者の父、仁三郎(安政六年生)はよく筆者に語られた。「弁吉の作った人形は、金石からお城迄歩いて来た。藩主の前で、藩主を睨み、腰の刀に手をかけた。藩主不快となり、作者弁吉を厳しく責められたと云う」弁吉明治三年五月十九日歿す。七十歳。法名は釈巧善、大野町伝泉寺に葬らる。

扱本書「応象寛曆書」がどうして泉丘校書庫に入ったのであろうか。同校記録帳を調べても未載であった。筆者あく迄臆測であるが、松田芹齋と云う人のもとより入ったのでなからうか。同校に色ガラス使用の「ゲントの種板」が数葉ある。是れはかつての加賀藩望遠鏡の発明者松田芹齋より入手が略々うかがわれている。筆者かつての大野弁吉「覚え書きノート」として、かの有名な弁吉自筆本が畏友大友奎堂宅にある。此れは高井二白氏の望湖楼(山上町お亭の小路)周辺の屑屋某氏に依つて求

められたものを、柳川書店より購入されたものであった。(柳川昇爾氏談)

此の望湖楼と目と鼻の近距離、卯辰山麓鷺町に芹齋家があった。芹齋、景周毎日の如く此の楼(望湖楼)に集合清談にふけたと云う。

筆者芹齋が二白に贈った角型望遠鏡と、弁吉写真機を見たことがある。因に芹齋の孫、松田壬作は後の金沢医学館植物学教師を勤め、金沢大手町元金沢市立図書館前(元医学館跡)に彼が植樹した赤松が現存している。筆者同じ書庫に蔵する前記カラー着色硝子板により、善本「応象寛曆書」の入手先を判ずるは、寔とに拙撰極まる妄言と言わねばならぬ。読者諒とされよ。

これでいいのだ

大森 玄 衆

(一中三十五回卒)

九月十四日にたまたま一泉同窓会の常任委員会に出席した折、泉ヶ丘高校では創立記念祭が催されていた。大講堂の外にひびき渡る吹奏樂にひかれて演奏を聞く生徒の中にまじり込んでみた。大きな樂器の立ち並び中をマイクを片手に腰をふりなが

ら歌い歩く若人の姿は六十年前スリ減った本多の森の校舎の石畳をドタバタで歩いた老先輩には少々なじみにくいものだった。外に出て中庭を横切ると、ビーチパラソルがいくつも広がっていて、その下でテーブルを囲んで男女生徒が生き生きと話合っており、外人客もまじって見える。眼の前のこれらの風景が日本の現状なのだ、これでいいのだと自分なりに納得する。

そのことはちやうど駅弁を食べる時、蓋にくっついた飯つぶから先に喰べる自分を若い人がどう見ようとそれでいいのだと思うように――。厳霜碑を見上げながら校門を出る自分の脳裡に、昔漢文の時間に復誦させられた

「樹欲静而風不止」

「子欲養親不待」

の文句がフト浮んだ。今この校舎に学ぶ若人達の意識の深層の中にもやはりこの思想は潜んでいるように思えてならなかった。



学校新聞

「桜章時報・いずみの原」

縮刷版の発売について

昨年秋、母校創立九十周年記念事業の一環として昭和十二年より昭和十七年にかけての旧金沢一中時代の学校新聞「桜章時報」の全号と昭和二十三年の旧金沢一高時代から現在に至る「いずみの原」全号の縮刷版が刊行されました。卒業された皆様には青春時代の往時の思い出として興味ある記録かと存じます。

同誌をご希望の方は、金二、五〇〇円(送料共)ご送附の上、当事務局宛お申込み下さい。

◎ 縮刷版 レザック表紙

A4版五八〇頁

〒921 金沢市泉野出町三十一

一泉同窓会

郵便振替

金沢〇―四二五四

Tel〇七六二(42)〇二二一

半公半私の優勝

斎藤 季夫

(一中三十六回卒)

此の頃思いたつて古い写真を整理していると、五十七、八年前のものが見つかった。一枚は中学三年のときの野球部員一同のもの。これは松任に住む同期の本保斉弘君が数年前に、「君も写っているよ」と言つて送ってくれたもので、先年北陸大会に優勝して甲子園へ駒を進めた名選手達の顔が見える。もう一枚は、これもまた憶い出の、北陸三県剣道大会で優勝した折の記念写真である。吉村校長を始め、吉野・小原・水辺の



土師 吉見 大村 齊藤 藤田 結城 清田兄 宇都宮 福見 本保 義江 清田弟 鍛冶 五得

諸先生(ニックネーム省略)らが厳しく膝を揃えている。

昭和三年四月末、高岡高等商業学校から「第一回北陸地方中等学校剣道大会」への参加勧誘状が届いた。

当時、私は剣道部のマネージャーとしていたのだが、部員諸君に諮ると、既に参加の決っていた夏の京都武徳殿での全国大会を前に腕試しとばかり一同大いに張り切り、早速吉野先生に相談したのだが、先生、一向に煮え切らない。眼はいつものように爛々と輝いていらつしやるのだが、どうも日頃の先生らしくなく、即答してくれない。

事情をいうと、この大会は「第一回」ということで突然勧誘が来たため、校友会として参加予算が計上されていなかったのだ。

そこで、われわれは汽車賃、弁当代自分で行こうという事に決め、その旨を吉野先生に申し出て諒承を得た。

六月だったか、まだ学期試験の始まらない頃、とにかく日曜日の朝早く、みんな何円かの費用を用意して高岡へ乗り込んだのである。

現地では、岡嶋先生を始め何人かの先輩達が終始面倒を見てくれた。

このような体験は初めてのことで、一同大いに感激し緊張した。外地に出て初めて「母校」というも



のの重味をしみじみと痛感したものだ。

わが陣容は、永井宏、北川政雄、上木宗雄、海野利兼(以上五年生)、広朝、村田君ら四年生三名、他にマネージャー兼応援団格として齋藤の他、田口利介、野村喜久男君らが居た。

試合は緒戦から何回戦かを順調に勝ち進み、愈々決勝戦に砺波中学と対することになったところで、吉野先生に電話を掛けようかとの声もあったが、優勝するまでと、逸やる心を押さえて決戦に臨んだ。

先鋒広朝から海野・上木まで、二対一と優勢裡に進み、副将北川は練ばって勝負一本宛で引き分け、さあ、

ここだ」と大将永井が立ち上るや、ものの二、三秒間に続けさま鮮やかに胴二本を勝ち取ったのだ。

先輩達から「優勝お目出とう」と大いに祝われ、ライスカレーを御馳走になり、凱旋の汽車の中、優勝旗を握りしめ正に意気揚々、思いはひたすら母校へと駆つた。もちろん、学校に電話したとき、「小使さん」の声も上ずつていた。

金沢駅頭には矢田富雄君らが何時のまにか百人近くの諸君を集めて迎えてくれていた。隊伍を組んで、白銀町、武蔵ヶ辻、尾山神社前、香林坊、広坂通を経て、石浦神社を右折すると懐しい校門が見えた。あの感激は忘れられない。一同、久田校長胸像前で、誇らしく優勝報告をしたのは言う迄もない。

翌日、朝礼の際、吉村校長から生徒一同に剣道部の優勝を讃えて、共に喜びを頷ちあったのだが、ただその中に「半公半私」という言葉があった。或いはこれは「半校半私」といわれたのかもしれない。とにかく「全校」ではなく、一部の有志参加であったことは間違いないが、「金沢一中」を代表して参加したのも事実であり、六十年近く経った今でも、この言葉の異様なひびきが私の胸に残っている。

土田兵吾氏のこと

平石英雄

(二 中四十一回卒)

今年の七月に「ゲリラ將軍」という三〇〇頁足らずの本が、東京の恒文社から出版された事に気づかれた方がおられると思います。然し書名から見て最近屢々目につく際物と思われた方は見過されたかも知れませんが、内容は、偶々軍籍には身を置いたが実には人間味豊かな一人物の評伝であります。

その人物とは、金沢一中第二十回の卒業生で、陸軍少将で終戦を迎えた土田兵吾氏であります。



土田氏は、昭和五十九年九月に満九十歳の長寿を町田市で閉じられました。

小生が土田兵吾氏の事を書く機縁は、同じ第二十回の同期生としてまだ健在でおられる谷恵吉郎氏に戴きました。兼々小生が私淑している谷氏からのお手紙で

「同期で心から尊敬する友人が二人おり、その一人は土田君であり、もう一人は村田義人君である」と云われており、戴くお手紙にも土田氏のエピソードが時々書かれてありました。その一端は、嘗て一泉

「六号」に「谷恵吉郎先輩のこと」と題した小生の拙文に書きました。扱って、土田兵吾氏は明治二十六年に金沢市に生れ、長町小学校―金沢一中―陸士―陸大のコースを経て大正二年陸軍少尉に任官し、

「のっけから朝鮮へ独立運動鎮圧の任務で出動を命ぜられ、その時見た無抵抗の民衆の力に強い感銘を受け、以後長い軍歴の間に彼はゲリラ、パルチザン、匪賊などと称せられた相手と戦い、苦戦し、悩み、考え、

相手の中に尊敬すべきもの共感すべきものを見るようになってゆく」

(「」部分は中島欣也著の本書からの引用です)

この様にして、何とも云えない豊饒な人間味に満ち、そしてその行動

が無言の説得力となってゆく土田兵吾氏の全人格を作って行った様です。きびしい中にも汲めども尽きない慈味と包容力の大きさ、云い換れば、清濁併呑の魅力ある人間像が之から以後約七十年を生きた土田兵吾氏の姿だと感じました。

一方この本から受ける土田兵吾氏のもう一つの魅力は、土田氏が在学に出没した幾多の実在の人物が、実名で書かれている事で、その群像が土田氏の人間味と見事にカクテルされて周辺の人物へも土田氏の性格が波及して行った事がよく判ります。

兎に角、この様に魅力のある人物が、嘗て我々と共にこの地上で昭和五十九年まで共に生きていた事を知るだけでも不思議な運命を感じます。

追記
小生は土田氏の事と共に、資料の集った時点で村田氏の事も一緒に書くつもりでいましたが、事務局からの依頼で土田氏のことだけを切離して書きました。

一言経緯を書き加えます。
六十年十一月一日



二紀会評議員
堀 義雄 (一 中四十二回卒)

同窓会 会員名簿について

創立九十周年記念事業の一つとして去る五十八年十月発行した同窓会会員名簿の在庫があります。

ご希望の方は一部三千円(送料込)を振込みの上、お申し込み下さい。

〒921 金沢市泉野出町
三―一〇―一〇
一泉同窓会
郵便振替 金沢〇―四二五四
電話 〇七六二
④ 一〇二二一

ニューギニアへの道

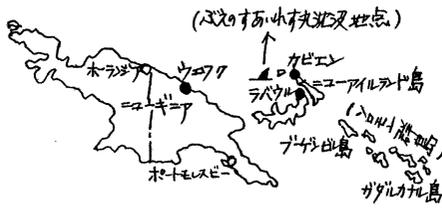
(我が太平洋戦記 その3)

片岡 茂太郎
(一中四十六回卒)

同窓会誌「一泉」第十号に「爆音」で南太平洋一週間漂流の後、昭和十八年十二月五日カビエン基地に収容されたところまで書きましたが、その続編です。

カビエン(日米の激闘つづくソロモン群島に近い、ニューアイルランド島の北端にある海軍基地)……海辺にゆらぐ椰子の葉、どこまでも高い真青な空、珊瑚礁に白い波がこまかく碎け、一本の帯となって踊っている。時折そよ風が頬を撫でていたりすると若い見習い士官達の胸は

南太平洋略図



甘ずっぱく、くすぐられてしまいそう。だが我々十一名は赴任途中なのである。これからニューギニア、ウエワクにある第四航空軍司令部へ行かねばならない。一週間の漂流でさすがに若い我々も、いささか体力を消耗していた。そして何よりも腹がへってやりきれない。海軍から分配される給食ではとても足りないものである。何処かに陸軍がないものかと聞いたところ、通信隊の一部がいることが分り、早速尋ねることにした。事情を説明し乾パンと煙草をいくらか分けてもらい、又四航空軍司令部への連絡を依頼する。

すこし日がたつてから気が付いたことなのだが、我々の起居している小屋からそう遠くはないところに現住民(メラニア系)が住んでいて物々交換に応じてくれることを知った。かびのはえたゴールデンバット五本と、大きなパイヤ二個、又一箱ならバナナ一房と交換してくれた。乏しい煙草ではあったがこれで大いに助かり我々の体力は回復していた。

カビエン基地には飛行場があつてソロモン群島方面の航空戦で消耗した艦爆隊等が時折飛来し、再編成のため傷ついた翼を休めていたし、又海戦で乗艦を失った将兵も大勢収容されていた。昭和十八年十二月中旬

頃の太平洋前進基地の横顔である。そして毎夜のように我々の乗つていた「ぶえのすあいれす丸」を沈めたと同じあのB24哨戒機が定期便としてやってきて、爆弾を飛行場へ落ちてゆく、その都度睡眠を妨げられていまましい。

確かな日は忘れたが或る日海軍さんから連絡があり、明朝ラバウルへ輸送してくれるとのこと、翌午前六時頃乗船する。兵曹長の艇長以下乗員二十名足らず、三〇〇トン位の駆潜艇である。朝食前のひととき、のどかな風景を楽しんでいると、誰かが空の彼方を指さして何か言っている。見るとあぶの集団のような、真黒い大きなかたまりがこちらに向つてきているではないか。とつさに敵味方何れの飛行機の編隊なのか分らない。然し我軍にはあれ程多くの飛行機がある筈がない。眼鏡をのぞいていた海軍さんが、「グラマンだ」と叫ぶ。その数、百数十機。黒い集団は編隊を解いてきた。一隊は飛行場の方へと向つてゆく。

今ははっきりと分る。翼の尖端のきりたった、ずんぐり胸に星のマーク、グラマンF6Fである。ぐんぐん降下し、すさまじい爆音と共に港に停泊していた艦船や施設に次々と銃爆撃をはじめた。完全に不意をつかれ、どの艦船もエンジンをかけていない。今度こそやられるのではないかと、戦慄が身体の中を走っていった。海岸から百メートル位離れたところに停泊していた我々の艇目がけて島の方から、数機のグラマンが次から次へと椰子の木すれすれに降下してきて、爆弾を二個ずつ落としてゆく、六挺の13ミリ機銃が一斉に火をふき、翼の前端が真赤に燃えているみたいだ。爆弾は私を目がけてその速度を増し、た。今あたるか、今あたるかと、私の身体は金縛りになっていった。……(後で分つたことなのだが、あまりに超低空できたため、椰子の木に邪魔されて、爆弾を落とす角度と、タイミングとか丁度我々の頭上を通り越すようになっていたとは)。艇には13ミリの機銃が一挺あるだけ、海軍さん銃身も焼けよと射ちまくったが、あたるものではない。爆弾は頭上を何個か通りすぎていつて我々のすぐ後ろにいた砲艦に命中、どてっ腹に大きな穴をあけて攔座してしまった。戦死傷者も何人かた様子。

どれだけ時間がたったのだろう。グラマンは銃、爆弾を使い果たすとやがて去っていった。艇のあちこちに銃弾の穴があいていたが助かったのである。これが戦場なのだ。まだまだ序の口なのかも知れない。

米軍機が去ったあとの海面はほげ
しい爆撃のため真白となっていた。
と大きな魚が、色も鮮明な南海の魚
がぼっかりと浮いているのである。

よく見るとあっちにも、こっちにも
夥しい数だ。海軍さん喜んですぐ飛
び込んでその魚を何匹も拾いあげて
きて、馴れた手つきで刺身をつくり
はじめた。朝の食事はまことに豪勢
なものであった。鯛の刺身や、切り
身の入った味噌汁、先程の修羅場も
どこかに吹き飛んでおいしい料理を
たらふく食べさせてもらったが、我
が方に相当の損害が出ているのは間
違いない。

その日の午後無事に再びラバウル
に着く。去る十一月二十四日はじめ
てラバウルの土を踏んでから一ヶ月
近くたった。内地を発つとき、
一緒だったラバウル組の山岸見習士
官（現宇出津保健所長）が宿舎に尋
ねてきてくれ、お前達もう戦死した
ものと思っていたのにと、再会を心
から喜んでくれた。そして中谷亮一
見習士官等はすでに潜水艦でブーゲ
ンビル島に渡ったことを聞かされる。

(7)
先号にも書きましたように、「ぶえ
のすあいれす丸」が沈没し、その漂
流中に我々の中人かば軍刀をはじ
め所持品をすべて失っていたので、
先ずは服装を整えることが先決と、
貨物廠へゆき、必要なものを調達、

宿舎で四航軍よりの指示をまつこと
にする。

十二月三十一日午後飛行場から連
絡があり、輸送機が我々を迎えに飛
来したとのことと小生他五名が先発す
ることとなった。飛行場に着くと連
日の激しい航空戦を物語るかのよう
に、塗料のはげた、然しなんとも優
美な姿の零戦が眼に入ってきた。戦
争の初期、ゼロファイターと恐れを
もって呼ばれていたあの零式戦闘機
である。我々の乗りこむ輸送機は、
爆撃機（呑龍）をそのまま輸送機に
転用したものであるからまことに窮
屈至極、六人腹ばいになって、なる
べく前の方へとかたまっていたが、
機長、尻（飛行機の）が重くて揚が
りにくいからもつと前の方へつめて
くれという。六人重箱のように折り
重なって漸く離陸、上空に昇ったと
たん、空襲警報がかかり、操縦の丹
保准尉の真険な表情、全速力で一日
散ラバウルをあとにニューギニアへ
向う。

夕方ウエワクに着く。輸送機は我
我を降すとき何処かへ飛び立って
いつてしまった。飛行場にとり残さ
れた時、一瞬、地の果に来たのでは
ないかという思いがよぎっていった。
人影もない、荒涼とした飛行場に、
数機の一式戦（隼）、三式戦（飛燕）が、
あっちに一機、こちらに一機と、わ

びしく佇んでいるだけ、ぼつんと粗
末な見張台が立っていたので、声を
かけてみたら兵隊が一人上から顔を
出した。四航軍司令部へ行くのには
どうしたらよいかと尋ねるが要領を
えない。海岸に出ると時々トラック
が通るからそれに聞いて下さいとの
こと。これが第四航空軍、第四飛行
師団の全保有機数なのか、内地にい
た時、日本の敗色はうすうす感じて
はいたが、前線へ来てみてこれは駄
目だとはつきり思い知った。

海岸にでると地平線の彼方に夕日
が半ば沈み、あたりは半分暗くなっ
ていた。全く静かである。足もとを
洗う波の音だけが耳を打ってくる。
内地を離れて数千キロ、六人の胸に
去来するものはなんであつたらう。
とあちらの方から一台のトラックが
ことごとと音をたててやってきた。
早速とめて司令部の方向を聞き、ゆ
けるところまで乗せてもらうことに
する。途中トラックを降りつき、漸
く軍医部に辿りつくことができた。
あたりはもう真暗、時計を見ると九
時をまわっていた。早速高級軍医の
ところへ申告にゆく。事務室にくっ
ついて作られた、椰子の葉で葺いた
粗末な六畳位の部屋を教えられる。

今日は昭和十八年の大晦日、固形
燃料のうす暗いあかりのもとで軍医
部員五、六人が集って忘年会(?)を
開いていた。卓上の料理は魚のかん
詰三、四個とするめ少々さびしい
ものである。申告をすまずとよきき
てくれたというこゝで茶わん酒を振
舞ってもらう。久し振りにのどを通
つてゆくまろやかな液体は様々な感
概をこめて又格別の味であった。
（戦後のこと、昭和二十五年東京で
日耳鼻学会の総会があつた時、懇親
会場でその時の軍医部員、武田中尉
にばつたり会つたのには驚いた。こ
の三月まで大阪医大教授であつた武
田一雄博士である。）
大晦日の夜は更けてゆく、ニュー
ギニア海岸にうち寄せる静かな波の
音を聞きながら、はるばるやってき
たものかなという思いと、やつと着
いたという安堵とが交錯するなか、
いつしか深い眠りに落ちてしまつて
いた。



心身障害児と過ごして

辻 成人
(旧姓 谷)

(一中五十一回卒)

「人間五十年、化転のうちに較ぶれば夢幻の如くなり」とか、「人生七十古来稀なり」とかいわれてきたが、現在の日本では男性七十五歳、女性は八十歳位が平均寿命である。

人間の寿命がかように延びたのは医学の進歩や生活環境の改善や平和であることが主因であろう。私は二十

年位前から心身障害児を相手に、日夜ヤブ医者生活を過ごしてきたが、

自分が還暦近くになってきて、今まで天職と信じてやってきたことが、

本日は神の意志・自然の摂理に反抗しているのではないかとと思うことがある。

自然世界では、生物に突然変異のために、正常ならざる状態が生ずることは広く知られることであるが、私が毎日行なっている仕事の目標は、

障害を持つ子供を少しでも改善させようとするのであり、元来、障害児は自然の摂理からすると、自然淘汰されるべきものであろうし、そのような子供に手術やその他の医療行為をし、機能訓練や教育を施行して改善向上を努力することは、あたかも警察犬ががむしゃらに犯人の跡を

必死に追いかける様相に似ていなくてもない気がする。

事実、以前は脳性障害児は高率で幼若期に死亡した。しかし、今は医学の進歩で救命可能である。障害児も簡単に死は死になくなった。例えば、

出生時の赤ちゃんの体重が二、五〇〇g以下を未熟児というが、最近では七〇〇g位の新生児が救命されている。自然のままに放置すれば必ず死亡する筈のベビーである。必然的に障害児は無くならない。

今、身体移動すら出来なかった子供が、数年間の訓練や種々の医療の成果として、独りで起立し、やっ

と歩けるようになった時、その歩き方が異常なパターンの歩行であつても、子供の嬉しさに輝く笑顔を見ると、

寝た切りの状態から脱した喜びは格別である。

所詮、人間社会は、私のような自然の法則に反したことに人生をかけてきた者をも含めて、歴史的過程として複雑に進むものらしい。

これは、文の林に分け入りて、世の荊棘を拓くべしと言うほど肩肘張って考えるほどのことではないようである。

去る十月一日、高辻会長より額装の上、贈呈いただき、道場に額額いたしました。道場にまた一つ、

伝統の灯がともされた感じで、あとに続く後輩には大きなはげみとなることと思ひます。

(高川記)

坂本三十次先生の揮豪

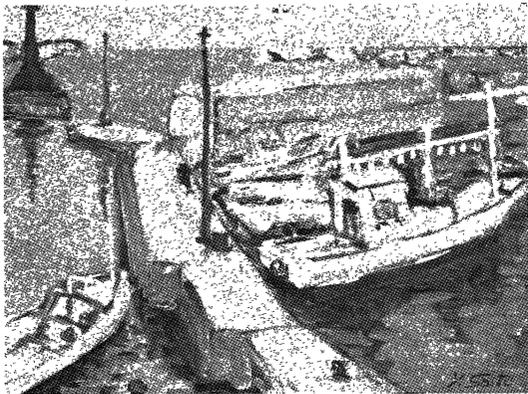
母校剣道場に掲額される

昨年九十周年記念式の際来校された坂本三十次労働大臣(当時)が道場で在校生相手に稽古に汗を流し、激励されました。その後、坂本先生より、何か後輩のためにということ、次のような剣の極意を示す揮豪が一泉剣友会の高辻会長のもとに届けられました。

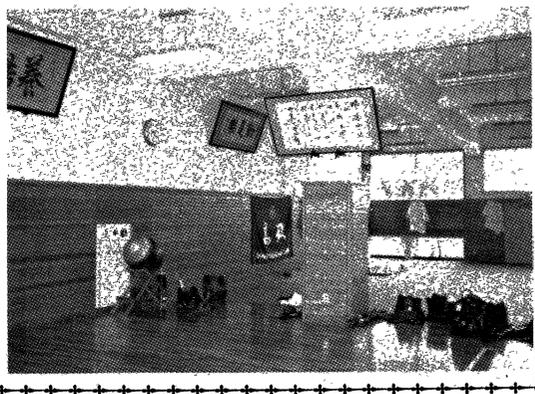
眼ハ遠山ヲ望ムガ如ク
手ノ内ハ生卵ヲ握ルガ如ク
腕ハ赤子ヲ抱クガ如ク
打ツ太刀ハヌレ手拭ヲ絞ルガ如ク
足ハ水鳥ノ泳グガ如ク
一足一刀一断

去る十月一日、高辻会長より額装の上、贈呈いただき、道場に額額いたしました。道場にまた一つ、伝統の灯がともされた感じで、あとに続く後輩には大きなはげみとなることと思ひます。

(高川記)



橋立漁港 斉藤弥吉(一中49期)



同窓の集い

第十三回

一中三三三会弥彦大会記

期日 昭和六十年五月十九、二十日
場所 新潟県弥彦温泉

やひこ観光ホテル

数日前からの晴天続きで案じられた天候も、幸い持ち直してひと安心。地元北陸勢及び関西からの松本兄を含めて十八名、午後二時過ぎ東三条駅着。出迎えのバスで新幹線燕三条駅で待つ関東勢及び北海道の米林兄と合流、総員三十一名、久瀧を叙す。直ちに越後一の宮たる名神大社、



思い浮べて校歌合唱。

翌朝は相憎夜来の雨で相当難渋したが、見学が阿賀野川畔の「豪農の館」だけのため、大いに助かる。同館は江戸時代中期からこの地にあり、所有田畑、山林は二、三七〇余町歩、最盛時には小作人二、八〇〇余名、収納米三万俵、県下第一の地主だったとのこと。庭園は雨に洗われ、花木も鮮やかに眼を楽しませる。この豪邸は明治中期に建てられ、百年近い風雪に耐えて往時そのままに保存されている純日本風の建築で、九千坪近い敷地内に建坪千二百坪、附属建物十数棟、茶室だけでも五棟も点在している。中でも三楽亭と云われる正三角形の小亭は建坪十一坪余、十

畳の菱形の部屋の左右に三角形の小部屋がある。柱、建具、畳に至るまで総てが三角形又は菱形の書齋兼茶室で、当時の大工以下の職人達の苦勞が偲ばれる。一時間余の見学の後、内部を改装したみそ蔵で昼食。新潟で解散。来年を約して西、東に袂を分つ。

参加者氏名次の通り。

米林栄（旭川市）、松本正雄（川西市）、小出武（長野市）和田光夫妻（高岡市）高田小市夫妻、柳瀬芳意夫妻、小寺俊一、近藤師家司、武藤文雄、村又吉、村上外雄、安田俊雄、山田義孝（以上関東組）井口政雄夫妻、池田知雄夫妻、岩城谷博、宇都宮亮一、岡田一男、門野実、田中嘉太郎、依 正、辻義雄、西村四郎市、村尾泰、村上進、藤田誠一（以上地元組）

（藤田 記）

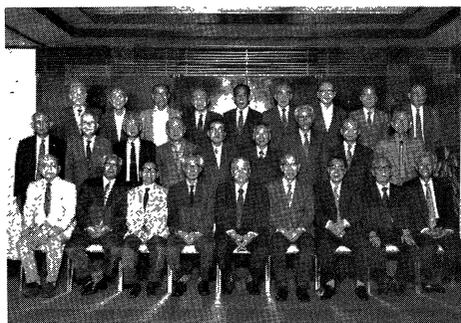
上廻るようになってきたのはうたた寂寥の感。
二時から喫茶室で積もる話、四時から宴会場にうつって賑やかなひと時。「九十歳までの長生きを目標してガンパロー」を合言葉に万歳を三唱して七時散会した。
（出席者）大滝武雄、福田重二、金岩明、牛塚藤雄、居村喜久治、南部貞一、脇水利勝、越田喜久治、木戸哲二、篠原一恭、畑中善三、板垣吉兵衛、嵯峨通、梶本国男、高橋外雄、大浦喜三郎、笠野外喜夫、小坂音次、内田唖太、松井順孝、浅地忠、杉野啓、結城与久、桜井喜文、清水忠次郎、市島亀太郎、大森玄衆（順不同）

——大森 記——

◆三五会の総会

昭和三年、金沢一中卒第三五期の「三五会」は毎年一回寄ることにしている。ことしも五月二十五日、駅前「ホテルニュー金沢」で総会を開いた。

参集したのは次の二十七名、欠席者は四十三名、亡くなった友の数九十名は、生きている者の数を遙かに



◆六桜会大会

(昭和六年卒)

卒業して五十余年、それぞれ古稀を過ぎると無精に過去のことどもが懐かしく想い出される。

毎年一回、八月の旧盆頃に開かれる六桜会の会合だけでは、どうも淋しいきわみと、昨年からは随時に臨時六桜会中食会なるものを開催して顔を合わす機会をもつようになった。

毎回の出席者も定着した十五、六名、合わす顔も同じなら交す話も又同じ、よくも根気よくこの会合が続くものと他人から見れば可笑しいと思ふだろう。

今年の定例六桜会大会が去る八月二十一日粟津の坂田屋にて催す。ご招待した恩師の宮沢外与治先生が心よく参加していただき、東京より中



山正敏君、大阪より河原安治君、松本猛君の兩名が急きよこれに加わり三十名が一堂に会した。

席上、本年四月の春の叙勲に際し勲五等瑞宝章を授与された大川兼夫、青戸泰賢の両君に対し、その榮譽をお祝いし新保会長より賀表に記念品をそえてお祝いとした。

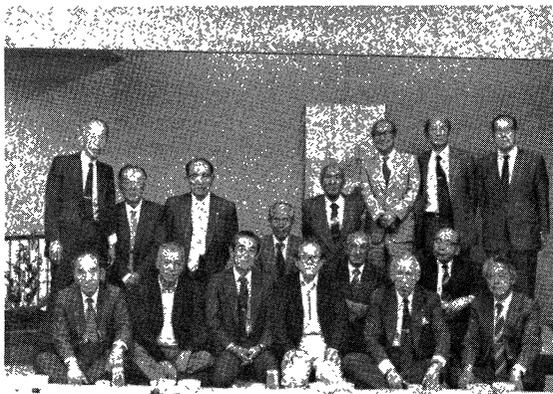
懇親会に移るや、いつもの同窓会風景と変ることなく三、四名のグループができてソコ、ココに懐旧談の花が咲く、五十歳、六十歳を熟年と称するなら七十歳を超えた老人が五十年前の学生にと変身したかの意気込みで、賑やかに時の移るのも忘れての宴となった。

翌日の散会に際しても、次の中食会が待ち遠しいとばかり幹事を責めたてる風景も見られ童心そのものの同窓会であった。

(西多 記)

◆関東七桜会の集い

関東七桜会(金沢一中昭和七年卒関東在住者)の集りは、ここ二年間は二月の初め頃実施していましたが、東京の如月の寒さは特に酷しいので、古稀を迎えた面々では誰れ言うともなく、今年から暖かくなつてから集まろうじゃないかと云うことになり、開催を延していたところ、西出大三兄が截金(きりかね)技法により人



間国宝に認定を受けられたので、七桜会会員のなかからこのような達人が出たことは復たない名譽なことで早速祝賀を主体とした集りを開こうと云うことになり六月十七日渋谷の美竹会館で開催することになりました。

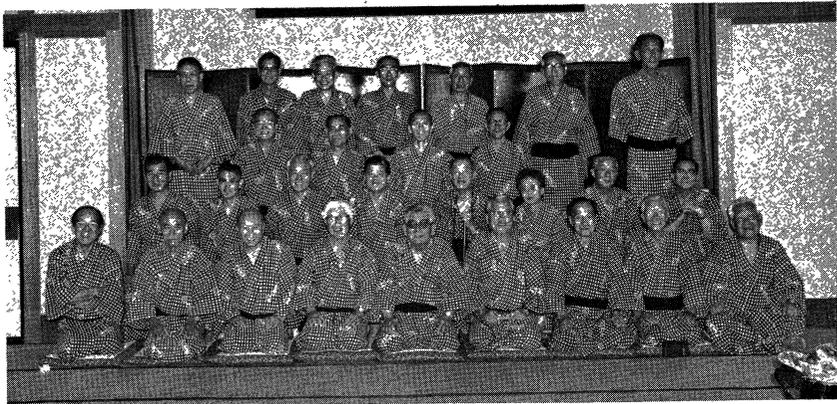
当日午後六時すぎ二、三人の欠席者あつたものの十六人集り、例年のレギュラーメンバーを超える盛会さでした。まず西出兄を中心として記念撮影をとり、瓜生兄が皆を代表して祝詞を述べ乾盃後宴に移りました。その間西出兄から作品の写真を配布、截金技法の説明と、永年にわたる苦心談があり一同傾聴する。

◆一中41期生(昭和九年卒)

古稀記念大会

何等かの口実をみつめて集りたる年齢になり、数え年で古稀だからということで、八月十三日(一泊)片山津みたにや水光園で、古稀記念大会を開いた。開催通知が一ヶ月程前であつた為か、或は真夏の為か、参加者は二十八名と従来の大会に比し意外に少なかったが、佐久間、府坂の両君が病をおして杖をつきながらの参加は一同を深く感激せしめた。

当日湖上で開かれていた花火大会には目もくれず、一昨年の卒業五十年記念大会以来の旧交を温めようと夕べりに忙しく、遅くまで話に花が咲いていた。酒量が予定より大だい



ぶん少なかったのは、矢張りお年のせい
尚早生れの者から、自分達は来年が七十歳だから、来年もう一度古稀大会を開けという緊急動議が出て、世話人で検討中であるが、人恋しく何かにつけて集りたいという気持の現れであろう。

大会の参加者は左記の通り。
赤崎雄七郎、伊佐敏男、岸原善作、小泉茂吉、近藤益秀、佐久間文雄、佐久間夫人、杉田正、須田正春、高岡精一、武内俊尚、中栄正雄、西田成好、野崎外喜男、登 恵式、英 勝雄、張江 武、番 幸次、府 玻 浩、牧沢善二、南 秀男、村北清栄、八十島健二、矢部陸夫、山岸智十郎、山口社義、芳田 保、吉本喜久次

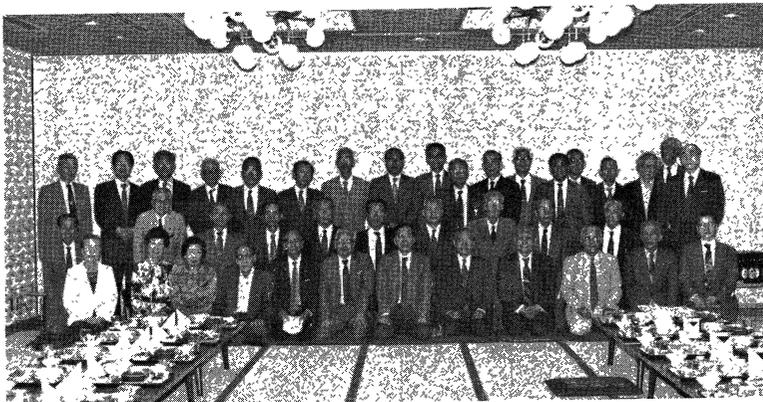
(牧沢善二記)

◆金沢一中十桜会

全国総会 報告

昭和十年同期の十桜会は、毎年全国総会を秋頃ひらいておりますが、本年は第十四回目の集りを、十月十一日と十二日の両日上野の弥生会館と鷗外荘で開催し、梶川欽一郎会長はじめ、約四十数名の会員と夫人達で久し振りの楽しいひとときを持ち、御互いの健在を喜びあいました。

同期生一七〇名中一〇九名の会員動静を伺ってみると、十五名の方が療養中であり、だんだん老年健康に気をつけねばとの話題も多くなりました。又本年は恩師諸先生の御出席がなく残念でした。御消息を載っている斎藤大六先生、竹内直良先生、塚野善蔵先生、宮沢外与治先生は瞿



鑠とされて毎日をお過しですが、藤田誠一先生は九月末腰痛で御入院され、後藤重郎先生は大阪で御病臥中との御近況を承り、みんな来年は御元氣になられて、御面談出来る事を祈りました。

例年欠かさずに編集発行している会員消息通信を会場で配布し、同期会らしい誼みの絆の役割を果しました。尚物故者が六十一名となりました

だが、来年の六十一年総会は、昔流の古稀の年輩者の集いとなる機会でもあり、物故者追悼会を併せて行うべきだとの建議もありました。散会后は散々伍々、上野の森、博物館、美術館の見学とか、六儀園後楽園等の名園を散策し、秋晴の午後、来年の再会を期してそれぞれ別れました。又鬼が笑うかも知れないが、来年六十一年総会は金沢在住幹事担当ですが栗津温泉で十月二十六、二十七日開催することが決定されました。

文責 十桜会東京幹事

古沢、久保田

同窓、先輩よりの

著書のご寄贈

- ◆浦 茂氏(一中三四回)
明治の軍神、アメリカの
元帥を走らす
- ◆二口 一雄氏(一中四二回)
豪華客船のドラと共に
- ◆斎藤 弥吉氏(一中四九回)
合同歌集「雪花抄」
- ◆加藤俊男氏(二中三八回)
ゲリラ將軍

異色の武人―土田兵吾

の生涯

寄贈

◆一中45・46期

合同クラス会

たまに二クラス合同のクラス会を開いてみようや。45期石崎、46期内田両代表の間で出た話が、それもおもしろかろうということと実現の運びとなったのが今年の合同クラス会。こんな会合が開かれるのもトシがなせるワザ。

於「金沢国際ホテル」

昭和六十年八月十七日

いくらすぐ上のクラス或はすぐ下のクラスと言っても卒業後五十年近くたった今となっては往時のニキビ華やかなりし美少年も、貫禄だけは十分の白髪禿頭の類多く

「アノオッサン 何という名前や」

「オマン 一休誰や」

幹事も楽ではない。

荒川宏(45) 内田一(46) 石野竜山(46)より報告をかねた挨拶あり、乾杯の音頭は一中時代校旗の旗手をつとめた遠来の安田道夫(45)。最後の万歳三唱は八木田喜良(45)でしめくくった。

この間幹事による出席者全員の紹介あり、あとは青春時代の想い出を肴に酒をくみかわし、大いに歓談、交盃。挙句の果は校歌応援歌。

「一中校歌」「猛勇」「桜が森」「香雲」「桜章」「南征の調」とよくも次から次とこれだけ歌ったものなり。いく

つ何十になってもチャンとリーダーは居るもの。

尚、特筆すべきことは墓参をかね

た旧盆のこの時期を選んだことに對し「本当によいタイミングに呼びかけていただき感謝する」という遠来の客数名の声があったことで、これもまたトシがなせるワザならん。

〔出席者名〕

関東 中村八郎 益谷一夫 安田道夫

夫 山本周三 尾本堅太郎 大西

正治

関西東海 西川利夫 野村欽一

磯部明

北陸 荒川宏 高島三郎 鳴瀬茂男

三田幸一郎 山崎昌 八木田喜良

内田一 石野竜山 石立実 稲松

敏夫 片岡茂太郎 金丸直治

小林貞夫 白沢実 辻良徳 登谷

栄作 中野輝一 深田元夫 藤井

欣一 二口敬 松田伸之介 松谷

功 松本郁郎 松本忠男 松本豊

次 松本洋三 宮北啓 宮村利雄

山田正勝 大垣秀邦 青梅洪治

太田定夫

(46期 太田記)

◆在京金沢一中

第四十七期同窓会開催

秋色の箱根湯本温泉、ホテルおかににおいて、去る十月十九日同窓会を開催しました。集る者二十五名は坂本三十次ご夫妻を囲み卒業後四十五年の積る話に花を咲かせました。今回は京都ということで和氣藹藹のうちに散会しました。

(世話人 中野喜代二)

◆五三の会

卒業四十周年記念大会

われわれが金沢一中を卒業したのは、太平洋戦争が熾烈を極める昭和二十年の四月でした。以来四十年の歳月を経ました。思えば、われわれが卒業後歩んだ四十年は、日本が敗戦の荒廃と混乱の中から立ち上り、今日のGNP世界第二位の経済大国へ発展した四十年でありました。戦争中は筋金入りの軍国主義教育をうけたわれわれが、それこそ百八十度の思想転換を余儀なくされ、それぞれ自己の生き方を模索しながら、日本の復興と発展の先頭をきって走って来たわけでありませう。いま卒業四



十年を迎え、齢六十に近く、社会的にも、家庭的にも一応安定した時期に入りました。ここで、過ぎ去った四十年をふりかえり、お互の健康をたしかめ、明日の未来への踏台にする意味で記念大会をやらうという声があがり、地元の世話人十人で、去る十月五日、われわれの巣立ちの地、現金沢泉丘高校に集合をかけた次第です。

当日は午後三時より、新装なった泉丘高校の大講堂で、物故会員の慰霊法要を、僧籍にある藤原・西河両君の読経で、しめやかにとりおこなう、その後母校在勤の高川教諭の案内で、校内の見学をしました。旧校舎の面影の全くない校舎ですが、道場で在校生の柔剣道の稽古をくいのように見つめていたまなざしには、少年の日の輝きを見た思いで、印象的でした。

(13)

夜は六時より、金沢スカイホテルで、恩師六名（吉崎先生、桑原先生、四日先生、高堀先生、吉田先生、二本先生）と会員六十六名の出席のもとで、懇親会をもちました。四位例君が世話人を代表して挨拶に立ち、吉田先生の発声で乾盃、宴に入りました。酔がまわるにつれて、先生方の前には友垣が出来、「先生、ワシ覚えとるかいいね」「先生に塵取で頭たたかれたの忘れんぞいいね」「そう

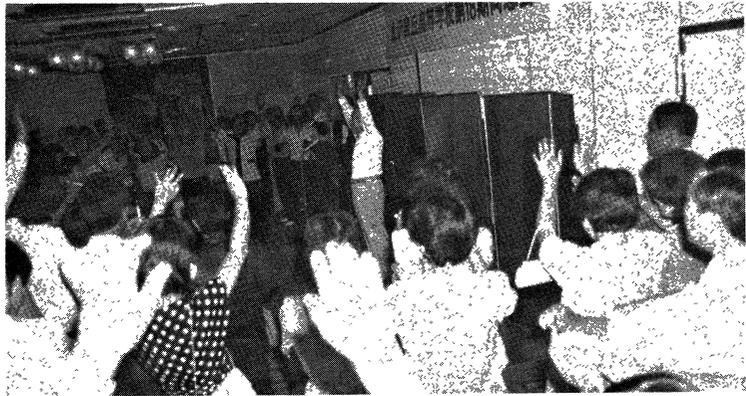
でもせんと、どうにもならん餓鬼もやったさかいな」といった金沢弁まる出しの会話がとびかい、ただ話・話・話……時のたつのも忘れていました。桑原先生が「誰も歌わんのなら、ワシが一つ歌う」と舞台上に上られ、訓辞につづいて、正調佐渡おけさを歌われました。最後は校歌斉唱でしめくり、散会しました。参加された六十六名の会員、思いはそれぞれですが、四十年の節目としての今日の一日を、深く心に刻まれたことと思います。そして、これからの人生を更に元気で生きられるよう心から念じて筆を置きます。
(高川記)

◆泉丘第十八回生

同窓会開催報告

去る八月十七日(土)ガーデンホテル金沢に於いて、第三回泉丘十八期同窓会(おはこ会と命名)を開催致しました。

三年時のクラス担任をされた諸先生のうち、高橋正行、安高、山村、大田稔、柳田、安藤三郎先生の御出席を頂き、総勢百十名余の参加があり、師弟それぞれの近況報告と同窓



生持参による当時のスライド映写等で二時間余、和気あいあいと思いつく話に花を咲かせました。

「おはこ会」は三年毎の開催であり、今回は初老祝を兼ねたイベントになりますので、一層趣向をこらした会となる様、幹事一同はりきると共に諸先生、諸氏の健康を祈念し万歳三唱をもって別れを惜しみました。

(第三回世話人代表 荒磯千舟記)

《一泉短歌》

小林 毅

(通信六回)

苗木市 道をまで 店をひろげて 苗木売る

墓へ参る 小さき石段 草萌ゆる

人絶えし 暫しの時や 桜ちる

清水汲む 水の香したたる 杓をもて

縁涼し 思い思いの 所占め

遅れても 一筋道の 秋の山

二人連れに 道ゆずられし 花野かな

同窓会通信

戦禍に沈んだ商船をしのび 「豪華客船のドラと共に」

を出版 二口一雄氏

「痛恨再び繰り返すな」と船員仲間への鎮魂込めて、二口氏がその戦時体験記を一冊の本としてこの夏に発行された。



著者の二口一雄氏（一中四十二回卒）は早大専門部卒で昭和十三年に日本郵船に入社、以来戦時中にかけて船員生活を送り、最初に陸軍病院船の第一号となった六甲丸に乗船、欧州航路の定期客船榛名丸、太平洋航路に就航した商船新田丸、続いてシアトル航路の平安丸に乗船した（が、急に大洋丸への転船を命じられた）。戦争の拡大とともに、これ等の商船は陸・海軍に徴用され、輸送船に或は改装されて航空母艦に生れ変わり、これ迄に乗船した船は次から次へと敵の攻撃を受けて沈没した。

「日本商船隊戦時遭難史」によると死亡した船員は三万人を超え、死亡率は陸軍々人二〇％、海軍々人は一六％で船員は四三％に達するという。二口さんは戦後各船の足取りを克明に調べ、自分の航海記録とを重ね合わせて一冊の本にまとめた。

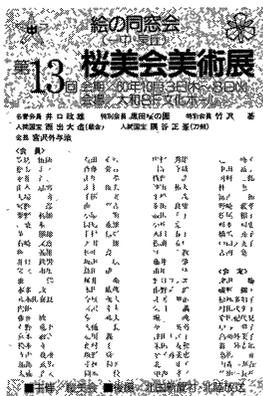
このほどこの一冊を一泉同窓会に對してご寄贈をいただき感謝に堪えません。

一中、泉丘、

美の同窓会ひらく

金沢一中、泉丘出身の美術愛好者が集まる「絵の同窓会」第十三回桜美会美術展が十月三日より大和デパート文化ホールで始まった。

会員百余名のうち書や絵画、写真、陶器の作品九十二点を出品、今春、人間国宝に認定された西出大三氏の丑（きり）金着彩木版画）や、同じく隅谷正峯氏の刀子のほか、日展、一水会、一陽会々員などの大作、力作が

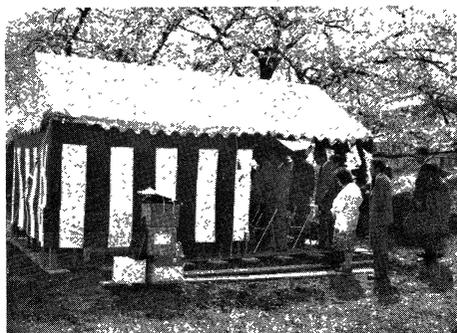


陳列された。当時の美術担当の宮沢外与治先生も連日、会場にあって、集まる卒業生への応対に忙がしく立ち廻っていた。

相撲場が再建される

昨年、全校舎が完成した当時からいろいろ議題に上っていた相撲場の設置が今春になって愈々具体化し、かつて相撲部部に在籍していたOB会より新設の議がたかまつてきた。毎年、卯辰山にて開催されている

全国高校相撲大会も来年は七十回大会と銘うち盛大に舉行されることもあり、又大会開催以来連続出場歴史をもつ泉丘校としては、是非これにも続けて参加したいとの学校側の希望もあり、今春までには相撲場の



建設を是非との案が出てきた。

そこで泉丘OBの一人である寺西正夫君が世話人代表となり、かつての旧一中の相撲部OBと協議の結果、急ぎ建設が決り同OBの人々を中心に一般卒業生よりの寄附を仰ぐことになり、建設にも辰村組社長の中側尚英氏の協力を得て四月十九日、運動場の東南隅の区画にて地鎮祭を舉行する運びとなった。

工事は順調に進み五月十日には待望の相撲場開きが行われ、関係者一同が祝盃を挙げた。

同相撲場脇には脱衣洗面場も併設され近代化した立派な相撲場として学校に贈られた。

現相撲部員も選手を更に強化し来年度にそなえて大いに張り切っている。

人間国宝に

截金の西出氏が認定される

文化財保護審議会はこの春、人間国宝として新たに石川県関係者二人を含む八人を認定した。

今回石川県関係で認定されたのは工芸技術の部で蒔絵の寺井直次氏と共に截金(きりがね)の西出大三氏である。これで現在の県関係者は故人を含めて十一人となった。

また一泉同窓会々員中、人間国宝として認定された会員は昭和五十六年四月、金工、日本刀の部の隅谷正峯氏(中四十五回)に続き、この度の西出大三氏(中三十九回)の二人



となった。現在、東京に在住されているが、昭和七年旧金沢一中を卒業後、東京美術学校彫刻科に入り、古美術品、木彫の修理技術を学ばれ、この間、金箔を細切りし仏像の裝飾に用いる截金の加飾技法に関心を示し、研究を深めた。截金の技法を置物、香合などの工芸品に応用し高い評価を得て今日に至ったのである。

◆一泉同窓会定期総会を催す

一泉同窓会定期総会が例年通りの十月十五日に開催された。この総会にさきだち午後三時より母校々庭にある厳霜碑前にて物故会員の慰霊祭が石浦神社長谷宮司の司祭のもとに執行された。前日迄危ぶまれた天候も雲一つない秋晴れに恵まれ、会旗のひるがえる厳霜碑の前で宮会長、分枝校長以下、同窓会員、学校関係者、遺族等三十余名が参列した。



総会は会場を金沢ニューグランドとし、午後五時より受付を開始した。本年は参加の会員が多く旧金沢一中出身会員約一〇〇名、泉丘出身会員八〇名の計百八十名の盛会振りであった。

総会には小川副会長の司会にはじまる、宮太郎会長の挨拶に移り、議案として会長以下の役員交替、改選の議が諮られ、次期会長に渋谷亮治氏が推薦され、ここに新しく第三代会長として渋谷会長が選出され会場の会員の拍手の裡に決定した。



続いて渋谷新会長の就任の挨拶があり、今後の会員の方々の協力をお願いするとの辞があった。事務局より前年度の会計決算報告あり、承認されたあと、分枝校長より泉丘校の現況の報告あり総会を終る。

つづいて懇親会に移る。折よく金沢へ帰省中の坂本三十次前労相もこの総会に馳せ参じ、乾盃の音頭をとって会場のふんいきを盛り上げる。会場はとこ狭しの盛会で卒業期ごに囲むテーブルも老いた先輩、若い会員が入り混じり交盃が続き談笑が交わされる。

最後は旧一中、泉丘の両校歌の交歓合唱、閉会には大正十年卒の高島弥生先輩が立ち、来年は更に会員を動員し、歴史と伝統に輝く一中、泉丘の同窓会を盛り上げようではないかと力強い檄を飛ばして散会した。



◇一泉同窓会富山支部六十年度 総会並びに上田コス先生を 囲む会開催について

六十年九月二十八日富山市駅前、ホテル吉原に於て、表記の会を開催した。

金沢一中時代、数学の指導をうけた剣道七段範士上田コス先生には益お元気で、富山県砺波市に於て、砺波建設工業協会長、富山県建設業

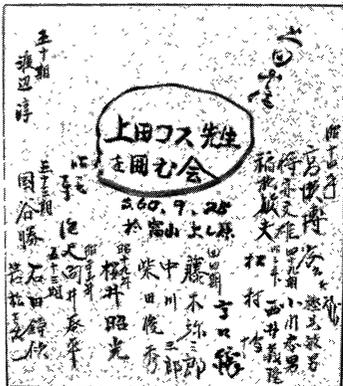


協会副会長として御活躍中で、一夕、懐旧談と、教師生活の中で金沢一中時代の八年間が一番懐しいとの思い出と、教え子達の一人・一人を相変わらず、きびしい態度で激励された姿は年一回の会合とはいえ、誠に心榮しく一同再会を約して別れた。今後は更に一泉同窓会・富山支部の輪を拡げて盛大に実施したいと考えている。尚、一泉同窓会員の富山県在住者は二百名をこえている。

幹事 稲松敏夫(十四年卒)

西井義隆(十七年卒)

高口 稜(二十年卒)



◇第二回 野々市一泉同窓会総会開く

野々市一泉同窓会総会が、九月二十一日(土)六時より町内のブルトンにて、会員約六十人が参加し、母校より分校公平校長をお招きして盛大に行われた。

開会にあたり山下貞雄会長が、昨年母校創立九十周年記念と同時に発足した本会の記念事業として、会員の募金によって、母校前庭に植樹した桜の苗木(ソメイヨシノ)が、早くも今年の春には身の丈こそまだまだ小さいが、それでも隣の大木に負けじと花をいっぱい咲かせ、本会の今後の発展をみるような思いがしたと挨拶。続いて事務局より事業報告、決算報告がなされ、次年度の役員改選には全員留任ということで総会を終了した。

◇第五回関西一泉会総会

再建第五回にあたる関西一泉同窓会総会が今春五月二十五日、大阪梅田駅前のアサヒビヤハウス・ウメダを会場として開かれる。

金沢よりは旧師宮沢外与治、張江啓、松川一雄の諸先生、学校側より校長代理として石田健教諭、それに同窓会本部より西多外喜次事務局長が出席、地元側は幹事の努力により旧金沢一中卒の会員が五十余名、泉丘卒の男女会員が百二十名、総勢百八十余名の大盛会となった。

会場とて狭しと、あふれる会員を前にして八十島健二会長の挨拶がある。年毎に盛況を加え、今年はとくに泉丘会員が多く女性会員が目立ち会場全体に華やかなムードがみまぎった。

次に来賓としてお招きした分校校長が、母校の現況を鑑みて、期すべき教育方針、さらにはご自身の教育理念を厳霜碑の一節を説きながらお話しになり、出席者一同学校長の情熱あふれる心情に接し、深い感銘を受けたことしきりであった。続いて一中・泉丘の校歌を斉唱し、本会顧問一中三十五期の大森玄衆氏の音頭で乾盃し懇親会に入った。応援歌ありカラオケあり、思わぬ人が思わぬ

歌をご披露して、拍手喝采の宴となった。また母校の近況(生徒の部活動など)については、会員の田村・押田両教諭から話があり、それを受けて特に野球部顧問(監督)の押田氏には、是非近いうちに甲子園の土を踏んでもらいたいと、叱咤激励の声が湧きあがり、最後に顧問の元収入役一中三十六期の橋場雄次氏の万才三唱で盛況のうちに終会となった。



宮沢、張江、松川の旧恩師のもとへ、かつてその教えを受けた生徒たちが集り、それぞれの当時の話に花が咲き賑やかな同窓会風景である。又、石田教諭がわざわざ母校より持参した、昭和十二年、金沢一中が本多町の旧校舎より新しく建築された現在の泉野出町（当時の富樫町）校舎への移転が在校生の手によって行われた当時の八ミリフィルムが映写された。

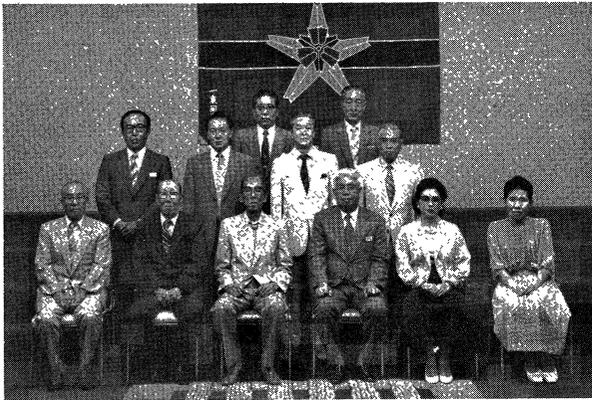
人気を博した。

その後舞台上に立ち歌う者、檄を飛ばす者、時の移るのも忘れて楽しい懇親会がつづいた。午後五時過ぎ、閉会の子定時刻も過ぎ一同旧金沢一の校歌、泉丘の校歌の合唱で散会した。

◇一泉同窓会

東海支部総会を開く

例年秋に催す東海支部の総会を未だ暑気の厳しい九月八日、弥生会館に於て開催した。



本年は事務局の準備不足や諸種の事情が重なり、例年の半数程の会員の集りとなった。とくに毎回欠かさず出席されていた米原佐市、伊佐務のお二方の急逝で再びお顔を見るこゝとが出来なくなったことは洵に残念なことであった。

総会は本部より西多事務局長を迎えて開会し、湯谷外喜男会長の挨拶につづき沖野事務局長より支部運営の年間経過報告及び会計報告があり、総会準備不足のお詫びを述べられた。尚、次年度にそなえて東海支部の強化を図るため役員の変更が提案されたが、現幹部にその件を一任することとなった。

続いて懇親会に移り各自のスピーチ、隠し芸にと移り和やかな雰囲気の中に進行し、最後に旧一中校歌、泉丘校歌の斉唱で幕をとじた。

ないのを常に悔やしいと思っています。責任を痛感すると共に、会長として心からお詫びします。

去る五月二十六日、母校の参観の催しは、余りいい日に恵まれたか却って参加が少く五名でした。然し、設計者の張江武氏の詳しい説明と、わざわざ持参して下さいました諸資料、更に三宅先生の御案内で隅なく見学させて頂きました。

時代の流れとは申し乍ら、中西知事が日本一と自負するだけあって誠に素晴らしい内容と偉容でした。心を新たにして、通信制の泉丘高校へ入り直しするかとは同行した者の期せずして口を出した言葉でした。然し恵まれすぎて果して勉強するか？女の子のケツばかり追い廻すんじゃないかとの囁きもありました。せめてものお札と感謝の意をこめて五万円を寄附して来ました。

参観後、母校正門前の「さか井」で昼食を兼ねてビールでノドを潤しました。つまり大変楽しく且つ感動したの一言に尽きる一日でした。

五月三十一日

平石英雄

◇市場一泉会の

諸報告について

娑婆で活潑な処の一つに数えられている市場に於て、その中の一泉同窓会である市場一泉会が余り活潑で

